



研修医の手記

大武 志帆



令和4年度より初期研修医として市立釧路総合病院にて研修させていただいております、大武志帆と申します。この度は連携ニュース「春湖台」への寄稿という形で挨拶の機会を設けることができ光栄に思っております。

私の両親は釧路の出身で、私自身も今から26年前市立釧路総合病院の向かいにあるシロアムマニティクリニック（現シロアムこどもクリニック）で生まれました。その後は札幌と旭川で生活しておりましたが、両親の実家帰省時などで度々釧路を訪れていました。マッチングが始まるまで知らなかったのですが、母が大学を卒業してすぐ薬剤師として勤務した職場が市立釧路総合病院だったそうです。私

が当院を志願した理由は上記のような縁があったためだけではなく、将来救急科に進んで地元北海道の医療を支えたいと考えている身として、道東の基幹病院である当院が大変魅力的に感じられたためです。

早いもので今年度の研修も終盤を迎えています。社会人1年目を過ごす中で他の研修医の存在は大きく、研修の支えとなっています。研修医同士で研鑽し合い、励まし合い、時にボードゲームで遊んだり、ろばた焼きを食べたりしています。何かと己の未熟さを痛感する毎日ですが、一步一步前進していきたいと考えております。ご指導して下さる先生方やコメディカルの皆様に、成長を感じていただけるよう精進し、少しでも地域の医療に貢献していきたいです。今後とも、皆様何卒よろしくお願いいたします。

当院は、1872年（明治5年）9月14日に官立釧路病院として設立され、本年度開院150周年を迎えました。当院は長きにわたり、幾多の困難を乗り越えながら、地域の基幹病院として高度急性期医療を提供する役割を果たしてまいりました。このことは、地域住民の皆様や関係機関の皆様の多大な理解とご協力のおかげであり、深く感謝を申し上げます。

当院におきましては令和4年11月に新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生し、患者77名、職員42名、計119名が感染する事態となりました。第三次救急など当院が担う医療の提供体制を維持するため一時的に診療機能を縮小せざるを得なくなり、そのために地域住民及び関係機関の皆様に多大なご迷惑をおかけすることとなりました。お詫びを申し上げるとともに、いただいたご協力で深く感謝申し上げます。

開院一五〇周年を迎えて

今般のクラスターをはじめ、これまでの新型コロナウイルス感染症の感染拡大への対応につきましては、地域の医療体制を維持するためには地域の関係機関の密接な連携がいかに重要であるか、ということを改めて強く認識する大きな契機になりました。新型コロナウイルス感染症だけでなく、人口減少や医療従事者の確保など、当院をはじめ医療を取り巻く環境は一層厳しさを増しておりますが、令和3年度に地域医療支援病院の承認を受けたことも踏まえ、改めて地域の関係機関との連携を強化し、そして共に地域住民の皆様に安全安心な医療を提供し続けていくことができるよう尽力してまいります。引き続き皆様のなご一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

市立釧路総合病院



第32号：令和5年1月4日発行

遷延するコロナ禍で見えてきた地域連携



市立釧路総合病院 院長

森田 研

令和4年11月上旬の当院クラスターでは皆様にご心配、ご負担をおかけしました。幸い発生から3週間後に通常診療を再開しましたが、感染の再拡大に備えて病棟調整を継続中です。クラスター前には急性期の受け入れを進めるために、慢性期に移行した治療の迅速な後方支援を医療圏の皆様をお願いしてまいりました。

また今回は厚生労働省や北海道庁からの派遣DMATとして、施設対応経験のある医師・保健師・行政職の皆様にご協力いただき、院内に設置した対策本部で当院DMATの活動を評価・ご指導いただきました。

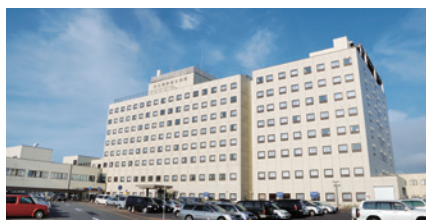
今回のクラスター中、三次救急医療については通常通りドクヘリ・交通外傷・周産期医療を継続可能でした。二次救急医療については臨機応変な各病院のBCPを平時から構築しておくことの重要性を痛感しました。特に情報共有については、院内外の一斉送信・情報共有システムを構築することが急務です。一方、医療従事者及びその家族の感染の影響は甚大であり、軽症者が多いとはいえ医療マンパワーの確保が大変でした。地震・津波・気候変動などの自然災害や今後考えられる国際紛争・サイバーテロなどの社会的災害に対して、第一に医療従事者の被害の把握と対処が求められます。今回、退職者やOBの緊急招集を行い若干名の予備役勤務が確保できました。各職種間の精神的・物質的サポートが行われ、病棟内の配膳・清掃・運搬、外部対応や検体搬送、患者移動、家族対応におけるタスクシェアがなされました。感染病棟で不足するユニフォームの調達など想定外のニーズもあり、これらの経験は今後の対応に繋げていきます。

医療圏の皆様には当院のBCP対応にご協力をいただき、重ねて御礼申し上げます。全国ニュースで当院の様子を知った各地の皆様からいただいた応援のメールに対しては、平時からの地域連携が継続されているので大丈夫ですとお返事をさせていただきました。当院のクラスターが落ち着いた直後から、今度は当院のDMATが他地域へ出動しております。患者支援センターの強化を行いつつ今後とも油断せずに細心の注意を払ってまいります。

理念「信頼と満足の創造」

経営方針

- 十分な説明のもとに患者の意思を尊重し、患者中心の医療を行います。
- 地域完結医療を目指し、高度医療・救急医療を充実します。
- 地域医療を支援するため、病診連携を密にします。
- 心温かな質の高い医療サービスを実践するため、日々研鑽します。
- 良識と協調性のある医療人として、意欲と誇りの持てる職場環境づくりに努めます。



市立釧路総合病院

発行責任 広報委員会

〒085-0822 釧路市春湖台1番12号

TEL(0154)41-6121・FAX(0154)41-6511

緩和ケア病棟のご紹介

令和4年10月1日に緩和ケア病棟を開設しました。釧路管内では、同年4月に開設した釧路ろうさい病院に続いて2か所目になります。

緩和ケア病棟は、抗がん剤治療の継続が難しくなったがん患者さんが直面するからだところの苦痛に対して治療やケアを行う専門の病棟です。患者さんやご家族が穏やかに過ごせるよう医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士など、さまざまな専門職が協力して患者さんにご家族を支えます。がんそのものに対する治療である手術、抗がん剤治療などは行いません。しかし、当院が総合病院である強みを活かして、患者さんの苦痛を和らげるための放射線治療や神経ブロックなど、それぞれの専門医と相談しながら提供します。

緩和ケア病棟開設にあたっては、既存の病棟を「病院」というより「ご自宅とホテルの中間」をイメージして改築しました。患者さんやご家族が静かな環境で過ごせるように、全体的に木目調で落ち着いた茶色とベージュ色を基調にした造りにしました。間接照明が病棟全体を柔らかく包み込んでいます。また、病棟に入るとすぐに広いラウンジが目に入ります。75インチの大画面のテレビがあり、日中は心地よい音楽が流れています。観葉植物や絵画、スタッフお手製の季節の飾り物などがみなさまをお迎えします。病室は、全室プライバシーに配慮した個室にしました。

当院の緩和ケア病棟の理念は、「からだやこころのつらさを和らげ、患者さんにご家族が『その人らしく』穏やかに生きることを支えます。」とし、可能な限り患者さんやご家族の希望に沿えるように対応しています。しかし、現在はCOVID-19感染拡大防止の観点から、緩和ケア病棟においてもご家族の面会時間や人数の制限をさせていただいています。

病床数は14床で稼働を開始していますが、今後は21床まで拡大していく計画です。現在は、当院でがんの治療を受けていた方を優先していますが、今後は他院で診療を受けている患者さんの受け入れを行っていく予定です。受け入れ開始時期や入院希望の場合の手続きについては、準備が整い次第改めてご案内します。



木のぬくもりを感じるフロア



ゆっくりくつろげる広いラウンジ

リエゾン・認知症ケアチームのご紹介

「リエゾン（Liaison）」とは、「つなぐ」「連携」という意味があり、2017年（平成29年）にリエゾンチームを発足しました。心の不調から身体の不調をきたす場合や、反対に身体の不調から心の不調を来す場合があります。このように心と身体の状態は密接につながっているため、リエゾンチームは心の観点から治療をサポートします。

また、高齢者や認知症の方が安心して入院生活を送り、身体疾患の治療を受けることができるよう、2019年（平成31年）にリエゾン・認知症ケアチームとなり、幅広い患者さんの心と身体をつなぐチームとして活動しています。

【チームメンバー】

精神科医、精神保健福祉士、作業療法士、心理士、薬剤師、認知症看護認定看護師、精神看護専門看護師の多職種で構成されており、それぞれの専門性を活かした活動をしています。

【活動内容】

対象の患者様やご家族の方への直接看護ケアの他、せん妄対策や認知機能低下予防のために、作業療法士による院内デイケアを行っています。週に1回、チームメンバー全員で病棟ラウンドをし、病棟の医師や看護師と共に支援が必要な患者さんのカンファレンスをしています。その他にも、病棟スタッフの困難事例にアドバイスする“お困りごとラウンド”も始めました。

【患者さん・ご家族の方へ】

不眠や不安、気分の落ち込み、せん妄、認知機能の悪化など、身体的な不調と同時に心の不調を来すことがあるかと思います。そのような際は、ぜひリエゾン・認知症ケアチームにご相談ください。

放射線診断・IVR科のご紹介

令和4年度より放射線診断・IVR科を設置し、曾山武士医師が着任しました。曾山医師は道東の三次医療圏の中で貴重なIVR（画像下治療）の技術があり、地域の急性期医療に大きく貢献する存在となりました。

放射線診断・IVR科では、CT・MRIの画像診断と、IVRを行っています。IVRは、超音波や血管造影などの画像とカテーテル（細径の管）を用いて、患者さんの体を大きく傷つけることなく、癌の治療や動脈性出血の止血、生検、膿瘍ドレナージなどを行う低侵襲治療です。血管系IVRと非血管系IVRに分かれます。入院でのIVRが必要な場合は、担当科（主治医が所属する科）に入院の上、治療を行います。



放射線診断・IVR科を設置してからは、院内はもちろん地域からのニーズも高く、近隣地域から患者さんが治療のため来院しています。また、緊急で治療が必要となり、曾山医師自ら中標津まで往診に行く機会もありました。

一緒に働く臨床工学技士（CE）より一言

放射線診断・IVR科と連携している臨床工学技士 岡田 敬です。曾山先生の高度な手技や考え方など、一緒に働く中で学びを得るものが多くあります。また、患者さんや周りのスタッフにもとても優しく、先生と仕事をしている事をスタッフの皆が光栄に思っています。IVRチームとしてこれからもご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

